

### 1. 「教職実践演習」を聴いて

教育学部で教員免許状を取得した身として、リフレクション・デイが、適度な意欲で教員免許状を取得したいという（特に教育学部以外の学部の）学生に対してふるいをかけているのは良いことであると思った。ただし、教科内容の重要性が軽視されているのではないかという状況が非常に恐ろしくも感じた。

### 2. 「教職実践演習からみた学生の姿」を聴いて

「心に響く教師の言葉」といった題材は、非常に現場的で、教員を目指す学生はきっと興味を持って聴講するだろうと思いながら、自分も関心を持って聴いた。現場の教員の意見も多く含まれており、説得力があった。自分の講義においても、少しでも現場の最新の状況を交えた内容で講義・実習を行いたいと思った。松山市教育委員会指導主事に聞きました「生徒指導主事の資質とは？」や、松山市内の校長先生に聞きました「学校現場が望む人材とは？（人間力・教師力・教育技術）」で挙げられていた項目は、どれを取っても、教員としてだけでなく、人間として、社会人として望む人材の項目であると思う。特に、普段からコミュニケーション能力が非常に低い学生が多いことを感じていたので、それが大学以外の場所でも感じられていることに少し安堵したが、日本全体の問題かもしれないと思い、残念でもあった。今後、生き物を育てる実習を通じて、コミュニケーション能力・人間関係を築く能力を育てることができればと考えている。ただ、「いかに上手に話せるかが勝負」という発言に非常に危機感を感じた。教科内容の知識・技量を深めなければ、上手には話せないと思う。中身がない故に、それを隠そうとプレゼンテーション力のみで頼るだけでは生徒は見破ってついていかず、教員に反抗的な生徒が増えるだけであると思う。教科内容の深さで生徒を指導できるような教員が必要であると思う。教科内容を軽視する

ということは教育の破滅を意味する。

### 3. 「教職実践演習～他大学の状況と教職実践演習の意義」を聴いて

「教職実践演習」の他大学の状況を聴き、まず、なぜ各大学でそれぞれのポリシーのもとで行われており、全国的にカリキュラムや評価方法が統一されていないのか、疑問に思った。教科によって多少違いがあるものの、基本的に目指す教員像や到達目標は、同じにはならないのだろうか。各大学のカリキュラムの特性は、各大学出身の教員の特性ということになるのだろうか。どのような教員が理想の教員かは、各大学が研究、すなわち模索中であるということなのだろうかと思った。各大学が互いに協力して、各部分を各大学の特色とし、国の指針に沿った統一的なカリキュラムや到達目標を作成すれば良いのではないかと思った。

「補習学習」について、「補習開始」の日以降に学生は『レポート課題』を教育学部の「教職支援ルーム」（教育総合センターに所属）に受け取りに来て、「補習終了」の日（深夜の 12 時まで）に Moodle2 の「対応する補習回」へレポートを提出するようにして、休んでも何とかならないようにしているのは良いことだと思う。免許状更新講習で、現職の教員を相手に教えていて感じたことの一つが、真面目な方が非常に多いということだからである。今後、自分の講義・実習において、講義等の出欠や提出物の期限を守ることは最低限指導していきたいと思った。個人的な考えではあったが、「教職実践演習」は、”大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして資質能力の習得状況を最終的に確認するもの“であり、新しいものを教えるものでないことに疑問という意見に同感である。また、「“教えないこと・待つこと”を学ぶ」という考え方にも大変共感した。教える教員・待てない教員（親）は、自分で考えない人間を育てるだけである。